

# 目次

## 巻頭言

東京都国際教育研究協議会

会長 長谷川 賢 …… 1

## 第1章 東京都国際教育研究協議会

### <事業報告>

|                             |    |
|-----------------------------|----|
| 平成19年度英語・日本語弁論大会 東京都予選      | 2  |
| 平成18年度生徒研修会                 | 6  |
| 平成19年度生徒研修会                 | 10 |
| 平成19年度21世紀東アジア青少年大交流計画 学校訪問 | 19 |
| 平成18年度研究協議会「グルジアの文化と調理実習」   | 22 |
| 平成19年度 ベトナムスタディツアー          | 28 |
| 平成19年度関東甲信越静事務局長会議 講演「開発教育」 | 39 |

## 2章 東京都国際教育研究協議会

### <参考資料>

|                   |    |
|-------------------|----|
| 2006(平成18)年度事業報告  | 40 |
| 2007(平成19)年度事業報告  | 40 |
| 2008(平成20)年度事業計画  | 41 |
| 2008(平成20)年度役員名簿  | 42 |
| 2008(平成20)年度事務局名簿 | 43 |
| 会則                | 44 |

東京都国際教育研究協議会  
会長 長谷川 賢  
(東京都立神代高等学校長)

## 日常の中の国際教育

国際教育と言うと、「あゝ英語の先生たちがやっているんですね」という反応が返ってくる場合があります。しかし、この東京都国際教育研究協議会の仕事に中心になって取り組んでいる先生たちは、英語の先生も確かにいますが、様々な教科の先生たちがいます。本誌「国際教育」37号は、東京都国際教育研究協議会の平成18年度及び19年度の2カ年分の活動の記録をまとめたものです。そうした仕事を担っているのは、主に本研究協議会の事務局の先生たちであり、そうした先生たちの努力の結晶がこの冊子になっています。この協議会の事務局の仕事は、自発的な活動という意味でのボランティア活動です。よくもまあ、平日の勤務を終えた後の夜間や休みの土曜や日曜に、研修会を開いたり、会運営のための協議をしたり、関係機関との打合せをしたりといったことを何年も続けていることと感心するばかりです。

そうした活動を支えているものは何だろうかと思うことがよくあります。その原動力の一番大きなものは、人から押しつけられたものではない、自分からやろう、やりたいと思ったことであるということではないかと思えます。事務局の先生たちの中には海外青年協力隊でかつて活躍した人もいます。その活動も、一概には言えないかも知れませんが、自分がどこかで人の役に立ちたいという思いに発してなされたのではないかと私は勝手に推測しています。

しかし、この会は、事務局の先生たちばかりでなく他の多くの先生方の日常の教育活動によって支えられており、発展を遂げています。国際教育には、どの教科においても取り組めますし、総合的な学習の時間やHRや学級活動でも、また部活動でも取り組めます。今や東京都の学校では、公立、私立を問わず、多くのクラスに外国人の児童・生徒がいて、日々の学校生活の中で、日本人だけでなく外国人とも接する時代になっています。その中で国際教育とは、広く地球人としてどのように人と接していけばいいのか、地球人として社会生活をどう送ったらよいかを考えさせ、実践させる教育であり、それはそのまま人としてどうあるべきかの教育でもあります。だから、国際教育に取り組む先生たちの校種や教科が多様であるのは当然なのでしょう。

今や世界各国は、今年の北海道洞爺湖サミットの中心的議題にもなっている環境問題にどう対処するかを真剣に考えなければならない時期になっています。この環境問題にしても食糧危機の問題にしても、まさに私たちが日常生活をどう送るかが問われています。世界の人々と共に生きていくことを考えさせる国際教育を進める上では、たとえば冷暖房の温度設定も、食べ物を無駄にしないことも、日々の他者とのふれあいの中で蔑んだりいじめたりしないことと同じように注意を払わなければならないことだと思います。

地球上の全ての人々が、国籍にかかわらず相互に理解し合い共に生きていけることを目指す国際教育は、校種や担当教科を超えて日常の教育活動と私たち教師自身の日常生活を通して実践することができるものでありましょう。

## 第27回 英語弁論大会

### 第7回 日本語弁論大会 東京都予選

ゆき

8月23日(木)に、ビッグハート出雲(島根県出雲市・第44回全国国際教育研究大会会場)で行われる第27回高校生英語弁論大会および第7回留学生日本語弁論大会の東京都予選を、下記の通り開催いたしました。

1 日時: 平成19年6月22日(金) 午後4時00分~

2 会場: 東京都立九段高等学校・大会議室

3 英語弁論大会予選規定

弁論内容...国際理解・国際交流・国際協力・国際ボランティア活動等に関するもの。演題は自由。高校生としての主張を含み、未発表原稿であること。

弁論時間...4分30秒以上5分以内(時間超過等は減点とする。)

審査内容...論旨(60点)・態度(20点)・音声(20点)を総合して審査する。

4 日本語弁論大会予選規定

弁論内容...国際理解、国際協力、異文化理解、多文化共生に関すること。演題は自由。高校生としての主張を含み、未発表原稿であること。

弁論時間・審査内容は、英語弁論と同様。

5 参加者

英語 6名

日本語 2名

審査の結果、以下の2名が東京都代表として関東大会に参加しました。

<英語弁論>

『Cross-cultural Bridge』 東京都立町田高等学校 2年 杉山 文

<日本語弁論>

『私 大切なもの』 東京都立六本木高等学校 2年 角田澄蔓

今回の弁論大会では、大会運営について様々な問題点が指摘されました。実施時間帯の問題、審査内容と要旨の提出方法、日本語弁論大会の参加規定など・・

今後参加者が増えていくことも予想されるため、大会の内容検討が必要とされます。来年度にむけて検討していきたいと思います。

< 英語弁論優秀者 >

## Cross-cultural Bridge

東京都立町田高等学校 2年 杉山 文

My name is Aya in Japanese. My name is Aya in English, too. In Chinese I am called Wenwen. The Chinese characters in my name, Aya, are pronounced “Wenwen” in Chinese. As you may know, when Chinese people call a child’s name, they usually use two of the same characters just like “Linlin”, “Ranran”, “Fanfan”, which are also the names of pandas. I love my Chinese name, Wenwen, because the double characters sounds so cute.

I lived in Beijing, China for 7 years from the age of 2 to 9. I spent almost half of my life in China. Chinese people around me were tender toward me. One day I got sick soon after my family moved to Beijing. I had to enter the hospital. On the day when I left the hospital, it was snowing. Mr. Sun who was a driver for my family was afraid that I felt cold. So he wrapped me in a big blanket, held me in his arms, and took me home. “Wenwen, Nihao,” he always spoke to me with a smile.

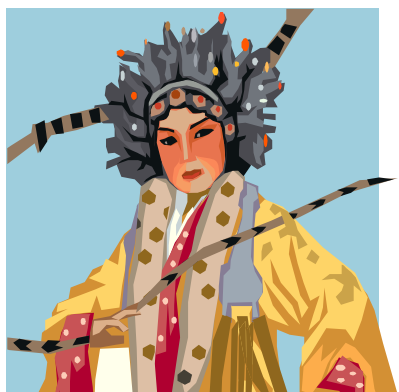
To tell the truth, Mr. Sun had hated Japan before he met my family. He had been taught at school that Japan invaded China and that Japanese killed a lot of Chinese in the war. That’s why he hated Japan. Mr. Li, my parents’ masseur, also had black memory of the war. His uncle was killed by Chinese soldiers because he had worked for the Japanese army during the war. So the Chinese people who got along with my family, as well as many other Chinese people, had a bad memory of Japanese people. Then why were they kind to me? Why did they smile at me?

I think it’s probably because they regarded me as a friend, not as a Japanese person. My father always said, “You must be fair with others whether they are Japanese or Chinese. Don’t have any prejudice.” I did as I was told. I greeted them, talked frankly with them, and laughed together with them. I kept company with them as human beings, not as Chinese. I only did what anyone would. However,

this common attitude changed their mind. Mr. Sun and Mr. Li said that they had begun to view Japanese from other sides after they had known my family.

International understanding seems difficult, but in fact I think it is simple. The barriers to mutual understanding are groundless prejudice, misunderstanding, and the lack of respect for others. Japan and China surely have an unhappy history. The past cannot be removed and must not be removed. We must build a bright future without forgetting the past. In order to realize this, I'm studying Chinese and want to go to study in China in the future. My dream is to be a small bridge between Japan and China.

幼い頃父親の海外赴任で移り住んだ中国で、周囲の人たちから親切にされたが、実は、彼らの心には日中間の暗い過去の歴史が影を落としていた。彼らの日本に対する認識を変えたのは、偏見を持たない率直な自分たちの態度であった。国際理解を深めるために大切なのは、偏見を持たず人間としてお互いに接し理解しあうことである。私は留学してもっと中国を知り、日中の掛け橋になりたい。



<日本語弁論優秀者>

## 私 大切なもの

東京都立六本木高等学校 2年 角田澄蔓

小さい頃から、父と母と私、すごく幸せな家族だった。幸せの中で生きている私は、本当の幸せとは何かをわからなかった。世界は美しく、キレイで、何でも純粹だなと思っていた。

私はとても大人になりたかった。神様は成長するたびにプレゼントをしてくれた。それは困難と挫折。辛さを知らない人間は人に優しくできず、本当の幸せを知ることができない。感動しない人間は人にも感動を与える事はできない。とてもありがたい事に、成長していくうちに、私を世の中の事を分かるようになった。

「ママ、なんでみんな電車の中でねてるの?」「...。みんなは、疲れているから。」「ママ、なんでみんな表情がないの?」「みんなは疲れて、ぼーっとしているから...。」「ママ、私、寂しいよ。」

それは3年前の私。日本に初めて来た時、パパはもう私の側からいなくなった。そして愛する家族、友達...私は一人でこの大地に立っていた。ただの三年間で、私を幼稚な少女から世間の分かる女の子に変えた。特に東京みたいな経済も科学も技術も...発展している街ではたくさんの事を知るようになるだろう。

私に生まれた国 中国も将来、こんな国になるんじゃないのかと思った。その時がくるといいな...そうかな...なんか心の中が一瞬がらんとした。

ずっと考えて、その事を思い出した。一つにものを得た時、必ず別に犠牲にしているものがある。競争社会は経済がすごく発展しているが、そのかわり気づかぬうちににんかがなくなっている。

何かがなくなっている...私に分かるのは、高いビルを建てる前にはすごくきれいな緑がありました。工場の煙を出す前にはすごくきれいな空がありました...自然の恵みを、人間はどんどん発展していくうちに破壊している。地球の恩寵をかえすのも考えなければ、将来は絶対後悔すると思う。今の中国も発展していて嬉しいが、環境を破壊している事を知った時はとても心が痛かった。しかも一番腹が立つには、無力で貧乏な人達が一番災禍を被っている。ツバルの人々は水浸しにならない家を失っていて、スーダンでは牧草地が減っていて戦争を起こした。たくさんの人を犠牲にして、ひどく残念に思う。

最近多くの国で福祉社会は競争社会に変えられていく。子供の出生率と仕事以外の時間が減ってかなり家庭生活に影響を与えていると思う。私は何かがなくなっていくのが心配。

家庭円満じゃないと社会もうまく行かないと思う。家庭の単位は小さいけれどとても大事。お金は決して一番大事なものではない。お金持ちになっても忘れちゃいけないものがある。それは、私がとても大切にしているもの 人間、心の温かさや豊かさ。

この長いスピーチを聴いてくれている方々のありがとうございました。一言いいたいのと、小さなお願いがあります

仕事がどんなに忙しいお父さんでも、子供とコミュニケーションをとってほしいです。そして、子孫に地球の美しさを語る時、ただ思い出の中ではないように、少しずつでも一緒に頑張りたい。

私にはまだまだ不足しているところ、知らないこと、たくさんある。でも将来は必ず社会に役に立つような人間になりたい。私大切なもの、いつまでも変わらないでしょ。



---

都立六本木高校 角田澄蔓さんは、**第44回全国国際教育研究大会**（8月23日（木）ビッグハート出雲 島根県出雲市）で行われた **第27回高校生英語弁論大会**および**第7回留学生日本語弁論大会**に関東地区代表として参加し、みごと「**文部科学大臣奨励賞**」を授賞しました。

平成18年度 生徒研修会

留学生・大学生などと大いに世界を語ろう！

## 「中学生・高校生のための国際交流プログラム」

報告 東京都立六本木高等学校 竹山哲司

東京都国際教育研究協議会の恒例行事となっている「中学生・高校生のための国際交流プログラム」を、平成18年度も拓殖大学国際開発学部・国際開発教育センターと連携して開催した。拓殖大学の留学生(主にアジア諸国出身)の参加を得て、都内中学生・高校生との国際交流を行うプログラムである。国際協力や交流などに興味のある生徒にとって、ワークショップなどを通じて、ほぼ同世代の参加者がそれぞれの思いを語りあうことは、世界に目を向け、異文化相互理解を進めるよい機会になっている。また、国際理解教育・開発教育・異文化理解教育・環境教育の実践や、「総合的な学習の時間」の事例研究の場としても評価が定着してきている。

1. 目的：より深い国際交流と異文化理解への開かれた心や態度を養成する。

直接、留学生などと交流し、その体験を通して、海外のこと、自分自身のことを再認識する。

2. 日時：平成18(2006)年11月23日(木・勤労感謝の日) 10時～16時

3. 会場：拓殖大学 文京キャンパスA館

4. おもな内容：

留学生との交流 (アイスブレイキング、ブレインストーミング)

昼食 (エスニックの仕出し弁当)

留学生との交流 (ダイヤモンドランキング、プレゼンテーション、振り返り)

5. 参加者：合計 71名

内訳；日本人高校生 22名、 日本人大学生 3名、 引率教員 15名、

教員・ファシリテーター

12名、

留学生(中国、ベトナム、台湾、ネパール、韓国、ペルー、ウズベキスタン 19名)



## <進学を控えた参加生徒の感想>

東京都立六本木高等学校 百瀬衣舞

AO入試に合格し来春からは大学で韓国語を学ぶ私は、担任の先生からこの交流会を勧めてもらった。人見知りの私は最初、不安を抱いていたが、今後の勉強のために、そして友だちをつくり自分の世界を広げるために、思い切って参加した。

初めて来た拓殖大学では、留学生など初対面の人ばかりで、かなり緊張していた。アイスブレイキングのゲーム(国名を書いたカードから共通点を探す)でグループを決めることになっていたが、初めに声をかけてくれた留学生がとても気さくな人だったこともあり、その緊張も少しずつほぐれていった。その後はだんだんに、共通点のあるカードを持つ仲間が集まり、今日1日をとともに過ごすメンバーが決まった。グループごとに教室に分かれてから行なった自己紹介では、まだ少しぎこちなかったが、留学生はみんな、自分自身のこと、自分の国のことなどを一生懸命に話してくれた。

ブレインストーミングのグループワークではまず、「あってもいい違い」と「あってはならない違い」について話し合った。自分の意見を主張しつつ、他人の意見についても考えていったが、なかなか結論を得るのは難しかった。しかし、それぞれの習慣や文化の違いについて、いろいろなことを知ることができた。

午前のグループワークで少しずつ打ち解けてきた私たちは、昼食のときは、自然と会話が弾んできた。短時間だったが、プライベートな話もしながら、食事を楽しんだ。

午後は、午前のグループワークの発表から始まった。自分たちのグループと他のグループの意見の違いについて驚き、疑問も持った。その違いについて考え、また新しい意見が生まれ、この繰り返しで、きっとよりよい考えや発想に繋がっていくのだろうと思った。

その後、グループごとに異なるテーマ(あなたの人生において大切にしたいものは? 最近の日本で気になることは? 結婚相手に望むものは?)で話し合った。私たちは、「最近気になること」をテーマにした。まずは各自が気になることを付箋紙に書き出し、大きな紙にどんどん貼り付けてい





のアクティビティ(例 佐藤君はバレンタインデーでチョコを 10 個もらったが、鈴木君はもらえなかった)[オーストラリアでは高校生がバイトをしているが、日本ではできない])などでは、多角的な思考を助け、多様な発言を引き出せるよう、しかし誘導になってはいけないと、養成コースで学んだことを思い出しながら進行を進めました。

中高生・留学生それぞれが、様々な角度から意見を述べ合い、異文化ならではの相違に驚いたり、同じ人間としての共通性を再発見できたりと、得るものが多かった様子でした。学校でクラスやグループで話し合いを行うときなど、それが良い結論に至れるか、良い学びの時間となれるかは、やはりファシリテーションの仕方による部分も大きいように思います。

今回のプログラムを通して、学校教育の場でも、生徒一人一人がファシリテーションについて学べる機会があればよいとの思いを強くしました。また、留学生と中高生が単なる異文化交流を超えて、ともに話し合い、学びあえる機会が、今後も数多く提供していただけることを願っています。

大変有意義なプログラムでした。参加させていただき有り難うございました。

#### < 参加した教員からの評価 事後アンケートから >

- ◆ 午前中からけっこう活発にしゃべっていた。参加者は比較的小となしかったというグループもある。
- ◆ いろいろな国の留学生たちとの交流ができるのかなと考えていたが、台湾・韓国・中国だけだった。日本にいる留学生の比率を反映していたという見方もある。
- ◆ アイスブレイクは、グループに分けることが主目的となった側面も見られた。
- ◆ もっとテーマを絞って話した方がよかったのではないか。意見交流が大切だったのではないか。ゆとりを持って話したかった。
- ◆ せっかくの機会なので、留学生たちにもっと活躍してもらう(主体的に動いてもらう)べきだった。
- ◆ 留学生たちにとって、一部の日本語が難しすぎて、見ていてハラハラしていた。留学生たちの表情から「わかっていない」ということが感じとれた。留学生の日本語能力もあり、あまり多くを望むのは無理ではないか。
- ◆ 国ではなく、その人という視点での違いを知っていくことが大切だと思った。
- ◆ ちがいを考える上で、生徒に許容する気持ちが生まれてきたことは、大きな成果である。

- ◆ 留学生が、写真や地図を持参したことはよかった。「紹介するモノ」があったことは大切。
- ◆ 個人の違いに終始せず、文化の違いへつなげていくことが大切だと思った。
- ◆ 日本人と留学生との比較を行ったが、もっと個人の考えを直接聞きたかった(相手の言葉を直接聞きたかった)。
- ◆ 比較文化的な側面があり、よかったと思う。双方向の交流に役だった。
- ◆ 疲れるくらい楽しい学びができたことは、とても良い機会であった。(生徒談「深いところまで話したことは久しぶりだったから、とっても頭が疲れた~!でも楽しかった。」)
- ◆ 交流に加え、知りたいことが満たされることも大切。学びをどこまで深められたか、幾分不安あり。
- ◆ ファシリテーター役の教員がもっと知識を持つことが大切。事前の準備も十分に行う必要がある。
- ◆ ダイヤモンドランキング、ブレインストーミングなどの手法は、参考となった。

## 中学生・高校生のための国際交流プログラム

～留学生と大いに世界を語ろう！～

報告 都立大森高等学校 藤田 美保

生徒を対象とした国際交流プログラムを今年度も実施しました。昨年に引き続き、拓殖大学国際開発教育センターとの連携でワークショップを行い、アジアと日本との関係について考え理解する一日となりました。

1. 目的：主にアジア出身の拓殖大学留学生や同世代の人との交流の中で、より深い国際交流と異文化理解への開かれた心や態度を養成するとともに、その体験を通して、世界のこと、自分自身のことを再認識する。
2. 日時：平成19年11月11日(日) 10:00～16:00
3. 場所：拓殖大学 文京キャンパス
4. 主催：東京都国際教育研究協議会、拓殖大学
5. 時程：10:00～10:10 開会式(主催者挨拶・講師紹介)  
10:10～12:00 アイスブレイキング(部屋の四隅、グローバルピング)  
ミニレクチャー「EUとは何か？」  
アクティビティ「アジア共同体を作ろう」
- 12:00～13:00 昼食(ナシゴレン弁当)
- 13:00～15:50 アクティビティ「アジア共同体を作ろう」  
日本女子大学附属中高等学校発表  
「アフガニスタンからの留学生を受け入れて」
- 15:50～16:00 閉会式(まとめ・振り返り)
6. 参加者：合計 69名  
日本人高校生 35名、  
日本人大学生 2名、  
引率教員 15名、  
大学教員・ファシリテーター 5名、  
留学生(中国、ベトナム、台湾、韓国) 12名  
グローバルピングの様子



今年の国際交流プログラムは、「アジア共同体は作れるのか」をテーマとして、留学生(アジア出身)や大学生を交えたグループを作り、

アクティビティを進めていきました。グループの中で、いくつかの「私は です」という文章を発表してお互いの価値観を確認した後、自分の国についての価値観を明確にするために、「自分の国の好きなところ・嫌いなところ」を1つずつ付箋に記入し午前中が終了しました。

午後は、付箋をKJ法でまとめるところから始め、自分の国のことをアジア全体の事と考え視点を広げながら「嫌いなところ=問題点」の解決法を探り、「良いところ」をさらに伸ばしていくための方法を考えていきました。そして、

“アジア共同体”を作るためには何が必要なのかをグループ毎に討議し、どんなアジア共同体が望ましいのか、どのような共同体を作りたいと思うのかを、キャッチフレーズとしてまとめていきました。

テーマが大きく、高校生にとっては難しいのではないかと危惧がありましたが、参加した高校生や留学生達は、積極的に意見を交わし、熱心な討議を繰り返していました。大人の考え方では「アジア共同体を作る」というテーマを与えられると、「作る」事が前提だと考えてしまいがちですが、高校生達の中からは「作れない」という意見も出され、その柔軟な考え方に感心させられる場面も多くありました。大きなテーマでも、高校生は高校生なりの意見を持ち、それをまとめていく力を持っている。その考えを表現する場を作

ることで、生徒たちの視野は広げられ、異文化理解をしていこうとする興味・関心・意欲を養っていくことができるのではないかと考えさせられたワークショップでした。



グループ発表  
KJ法による話し合い



こんな**”アジア共同体”**を作りたい！

(生徒発表意見)

### ”アジア共同体”は作ることができる・・・というグループ

・「**アジア共通の子ども権利を作る**」共同体

アクションプラン：子どもの教育の充実を目指す

知識・技術を身に付けて労働の機会を増やし、収入を増やすことがアジアの国々が抱えているすべての問題の解決につながるはず。

・「**手をつなぐ**」共同体

アクションプラン：お互いの国のことを良く知り理解する

相互理解を深めることで、環境問題解決と経済の発展が同時に促されていくのではないか

・「**環境と歴史建物を保護する**」共同体

アクションプラン：環境とお互いの国の歴史を大切にする

お互いの国を大切に思う意識を大切に、保護のための技術を共有する

### × ”アジア共同体”は作ることができない・・・というグループ

・「**アジア相互依存できる**」共同体

アジア諸国は各国の文化・宗教・言語が違いすぎるので共同体を作るのは難しいがお互いの国を認め合おうとする努力をしていくことは必要

・「**目標としての**」共同体

現実的に考えるとアジア共同体を作っていくことは難しい。目標として掲げ相互理解を進めていく程度にとどめていったほうが良い。

### 共同体を作る前に考えるべき事がある・・・というグループ

・「対話」をしよう

共同体ということを考える前に、もっとアジアの国々のことを知り、日本について知ってもらわなければならない。そのために、今は対話をするのが大切

日本女子大学付属中高等学校からは、自治会（生徒会）の手によって受け入れ準備から当日の時間割作成まで、企画・立案・実施のすべてが行われた「アフガニスタンからの留学生受け入れ」についての発表があり、その充実した内容と生徒の皆さんの実行力に、いろいろな意味での刺激を受けた発表でした。

研修会当日は、都立高校合同説明会の日と重なってしまったこともあり、参加者が少なかったことは残念でした。また、多くの留学生の方に参加していただきながら、その利点をうまく生かすことができず、グループワーク以外では日本の高校生と交流を深めていく場面を作ることができなかつたことが、反省点ではなかつたかと思ひます。高校生たちの参加理由は様々で、決して自分から進んで参加した生徒ばかりではありませんでしたが、一日の研修を終えて帰って行く生徒たちの顔には皆、何かを学び取つたという充実感を得た笑顔が溢れていました。次回の生徒研修会では、多くの中高校生や教員の方々に参加をしていただき、異文化理解を深めていく機会を持っていただきたいと思ひています。

## 国際交流プログラムの経緯と発展

報告 東京都立六本木高等学校 竹山哲司

平成19年度の「中学生・高校生のための国際交流プログラム」は、拓殖大学国際開発学部・国際開発教育センターと連携して開催するようになって3回目である。国際開発教育センターの先生方にファシリテーターや講師をお願いし、留学生の協力を得て、いろいろな交流活動を行つてきた。16年度まで、国際協力事業団（JICA、現国際協力機構）の協力を得て、JICAが招聘している研修員との交流会を行つていたが、英語での交流はいくらか敷居が高く、中学生なども参加できるよう、裾野を広げるための方策を求める声が引率された先生方からも多く寄せられていた。そのような折、開発教育の研究・実践を通してしばしばご指導をいただいている赤石和則教授から、時宜にかなつたご提案をいただき、拓殖大学と連携して、日本語を共通語とした国際交流プログラムが行えるようになった。

留学生の多くは八王子キャンパスに通学しているため、文京キャンパスまでの交通費の捻出が頭痛の種であったが、19年度からは、財団法人日本国際協力センター（JICE）の支援が受かれるようになった。

留学生の中には、拓殖大学と連携を始めた当初からずっと参加してくれた中国人もいれば、来日1年足らずながら流暢な日本語で国のあり方を熱弁してくれるウズベキスタン人やベトナム人もいる。外国語を身につけ、はるか故郷を離れて日本へやってくる留学生は、学習の意欲も目的意識もプレゼンテーション能力も高い。国際交流プログラムではあるが、参加した高校生にとつ



では、大学生とは如何にあるべきか、進学するための心構えを学ぶ場にもなっている。参加した生徒と留学生それぞれが活発に語りあうことは、世界に目を向け、異文化との相互理解を深める絶好の機会になっている。

高校生としてこのプログラムに参加し、進学後はサポーターとして関わってくれる大学生もおり、企画したり引率した教員にとっては、成果を確認できることは嬉しい。教員にとっても、開発教育や「総合的な学習の時間」の事例研究および実践の場として有意義である。

### < 日本女子大学附属高等学校生徒の感想 >

今回の国際交流会は、以下の3つの点において、私が今までに体験してきた国際交流とは全く異なっていました。

まず1点目は、留学生の方々が大学生であったということです。同い年の高校生と語り合うことも大切ですが、やはり大学生、特に異国に渡って一生懸命勉強しようという留学生の方々は知識も豊富で、社会を本当に客観的に見つめていらっしゃるな、と感じました。日常生活では聞くことができない考えや、知ることのできない様々な想いに触れて、直接意見を交換し、真剣に議論する機会をいただけたことを本当に幸せに思いました。

2点目は、ひとつの具体的なテーマ、課題について話し合えたことです。私が今までに参加した国際交流会等は、どうしてもテーマが日常的なもの（例えば、それぞれの国での学校生活について等）になりがちだったのですが、そういった場ではやはり交流が表面的なものになってしまいます。それに対して今回は「アジア共同体をつくる」というひとつの目標に向かって少人数で話し合うことで、自然と言葉の端々にそれぞれの価値観や考えが表れてきて、真の意味での「交流」ができたように思いました。

最後に3点目は、参加者全員が共通の言語を無理なく話すことができた、ということです。私はアフガニスタンから留学生を迎えた際に、互いに英語を話すことができてよかった、と思う反面、互いに外国語として習った言語でコミュニケーションをとることのも



どかしさをも感じました。この国際交流会では留学生の方々も流暢な日本語を使っていらして、さらに私たちも助け舟を出すことができたので、「言いたいことが伝わらない」という、国境を越えた交流の際には付き物ともいえる高いハードルを、乗り越えることができたのだと思います。本当に貴重な体験をさせていただきました。6時間があっという間に感じられ、友人や後輩にもこの体験を伝えたいと思いました。

このような会に参加させていただけたことをとても嬉しく思います。本当にありがとうございました。

### <都立高校生の感想(抜粋)>

中国人留学生のお話ですが、中国には多くの民族がいるとの事でした。その中でも特に少数民族は、学校等で差別をされ、いじめの対象にされてしまうそうです。私は日本で普段生活している中では、人種差別に遭遇する事は滅多にありません。これまで人種差別について学んでも、本当に理解していたとは言えないし、実際におきている問題という実感もありませんでした。でも直接話を聞き、やっと理解できたと思います。国内の貧富の差についても話してくださいました。

中国の貧しい家庭では、毎日の食事がままならないことばかりだそうです。「今日のご飯、何を食べよう。」と、食べる物が無いために悩み、飲み水は遠く離れた所からくんできた水を貯め、その上澄みを飲む生活だといいます。この話を聞いた時、私達は本当に恵まれた環境の中で生活しているのだと思いました。何を食



べるか、悩むのではなくて迷える生活をしている上に、食べられない人々の事を考えずに食物を粗末にしていた事を反省しました。

新聞には書かれていない外国の高校生活についてや、現在この世界で起こっている問題を知りました。そして、私に考える機会を与えてくれました。今は日本にいても、世界の国の情報が入ってきます。しかし実際に、外国の人と話すのは、新聞で得る知識と種類が違います。一般の人の目線から見た中国、韓国の様子や日本について思うことなどは、とても新鮮に感じました。また、留学生と話をして思ったことですが、国際交流で自国について説明できることは、大切だということです。自国について深く考え、意見を持つこと

は国際交流において必要だと思います。自国を見つめつつ、外国と意見を交換し、学ぶことは国際交流の形の一つではないでしょうか。国際交流プログラムに参加して、異文化に触れたり、世界の現状について考えたことは貴重な経験となりました。この経験を、これからの二十一世紀の国際感覚に、役立てていきたいと思います。

一番おどろいたのは、日本と中国の勉強時間の差だった。日本は8時半に始まり、3時か4時で終わる。放課後は部活やバイト、遊んだりする。中国では日本より朝早く始まり、夜の6時~7時ぐらいまでやっているそうです。途中、2時間の軽い睡眠時間があったにしても、これだけの時間はすごいと思う。さらに放課後も宿題をやったり、塾に行ってる人もいるらしい。だから当然、遊ぶ時間もバイトする時間もない。日本はこんなにも中国との勉強時間の差があっただけなのかなと思う。ただでさえ、「ゆとり教育」で簡単になっていっているのに…。この話は自分自身にもいい刺激になった。中国の人からは、勉強時間とスカートの短さに驚かされたと言われました。

留学生の方から見た日本人は、不思議な所が多いそうです。電車の中で化粧をしたり、スカートが短いのが理解できないと言われてしまいました。日本人は勉強を全くしていないように見えるとも言われました。中国や韓国の方は朝の7時頃から夜の9時頃まで学校にいると聞いた時は、とても驚きました。ほとんどの人が国立大学へ行きたいと勉強するのに、日本人は私立の自分にあった大学へ高い学費を払って行く人がほとんどです。この話を聞いた時にもまた、日本は恵まれすぎた国だなと思いました。

この国際交流で、いつも遠いことを理由に見ていなかった所を見られた気がします。もちろん勉強として、日本とは違う文化や環境があることは学んでいました。しかし直接聞いたり、体験する方がより多くのことを知ることができます。曖昧な理解で終わってしまうのではなく、正しい現実として、受けとめられるのです。私のグループには韓国と台湾の方がいて、それぞれの国のことや、日本と違う文化や生活について、たくさん話ができました。直接聞くことは、本で学ぶよりも分かりやすく、もっと知りたいと積極的になります。そしてたくさんのことを学び、韓国や台湾がとても近いものだと感じるようになりました。知識が増えたからかもしれません。しかしそれ以上に、留学生の方々と仲良



くなれたからだと思います。それは本当に嬉しいことでした。この国際交流プログラムで「あなたは今、幸せですか」という質問が出てきました。私は幸せだと答えました。今の私はこのように学ぶ機会がたくさんあり、誰かと笑い合うことができるからです。他にも色々な意見が出てきました。みんなそれぞれに違った考えを持っているからです。そのように世界にはたくさんの方がいるのだということも、今回学べたことのひとつです。たくさんの方の大切なことを学べた、この国際交流プログラムに参加して本当に良かったと思います。

日本と外国の「人」に対しての接し方の違いが話題になりました。日本に来た留学生は、「日本人はお互いに知り合えた外国人にはやさしいが、そうでない人にとってはとてもつめたい。」と言っていました。他の国だと外国人だという隔たりはあまり少なく、結構すぐ仲良くなれるらしいです。その二つの違いを聞いて、日本人は非社交的というわけではなく、外国人に対して言葉という壁があるので、それを破ってどう表現するのが苦手なだけだと思います。もし変に表現して変な奴と思われてしまうかもしれない、という考えが少しでもあるからなのかもしれません。この体験を通して、外国の見方ばかりでなく大きく自分の見方が変わりました。自分はもう既にここにいるだけで幸せであるという事を心のすみにでもいいから残しておきたいと思いました。そして少しの人だけでも助けられるように、飲み物などを買うのを我慢して募金をするように励みたいと思います。

長年ある環境にいると感覚が麻痺しまうことに気づきました。最初の質問は「なぜ日本の高校生のスカートは、そんなに短いの？」でした。私は今までこのような疑問を持ったことがありませんでした。なぜなら、今いる環境ではそれがあたり前になっていたからです。自分では普通だと思って疑問にも思わなかったことが、他の環境の人が見ると不思議なことだらけであることを知り、物事は客観的に幅広い視野で捉えていかなければならないということを実感しました。このプログラムに参加したことで、自分がどのような立場であるのかを知るためには、他の立場の事を学ぶことが必要不可欠だと感じました。国際交流とは、他国の事を学ぶと共に自国の事を再認識させてくれるものだとは私は今回強く実感しました。

相撲に興味をもたれていることもわかり、日本人力士にもっと頑張ってもらいたいと思いました。サッカーと野球についての話も聞きましたが、日本の食文化はかなり独特だと思いました。生モノというくりで苦手という声も、ほぼ全員から聞きました。靖国参拝に関しても、中国の方々は別にいいんじゃないかと言っており、デモの人達も多数はただ

のヒマつぶしだと言っていました。そんなことに食いついてる日本人の浅はかさを感じました。昼食時には、日本のサブカルチャーについて話したところ、新世紀エヴァンゲリオンの綾波レイ人気はやはりすごいものだと言いました。これからの日本が誇っていくものだと思います。

日本のことなのに、日本人の私達が答えられないことが多いことに気付かされました。世界から見た日本と外国の事情を知ることができ、楽しく、そして貴重な時間となりました。意外だったのは、韓国ではキムチが食べられない人がいるということでした。よくよく考えれば日本人だって寿司や刺身が食べられない人がいるのですから当たり前です。そんな単純なことさえ、その国の人から聞かないと分からないなんて、自分の国際意識は低いんだとあらためて考えさせられました。国際交流会というのには初参加なので緊張していましたが、意外に皆さんがフレンドリーで、すぐ緊張をとくことができました。外国人に対して勝手なイメージを作り出していた自分に改めて気づかされました。このことをきっかけに、いろんな人と先入観をもたずにコミュニケーションをとるように心がけるようになりました。

このような機会をもち貴重な体験ができました。参加して本当によかったです。



# グローバルビンゴ

自分の名前 \_\_\_\_\_ 自己アピール \_\_\_\_\_

ルール1 . はじめに、お互いに名乗りましょう。

ルール2 . 次の項目に当てはまる人を見つけましょう。

ルール3 . 名前の欄は、すべて異なる人の名前を書いてください。

ルール4 . タテ、ヨコ、ナナメのどれか1列が完成したら、『ビンゴ』と叫んで下さい

|   |                          |                                      |                                 |
|---|--------------------------|--------------------------------------|---------------------------------|
| 日本以外の国に行ったことがある人  | 国際協力ボランティアに興味のある人        | 将来、日本以外の国に住みたい人                      | 家族や親戚が日本以外に住んでいる人               |
| 名前  | 名前                       | 名前                                   | 名前                              |
| どこの国  | どんな活動                    | どこの国                                 | どこの国                            |
| 今、日本製以外のものを身につけている人   | 2つ以上のアジアの言葉で「ありがとう」が言える人 | <u>本・中国・韓国以外</u> のアジアの国を2つ以上言える人・・・? | アフリカの国を2つ以上言える人                 |
| 名前  | 名前                       | 名前                                   | 名前                              |
| どこの国の何  | どの言葉                     | 名称                                   | どこの国                            |
| 他の人に自慢できる特技を持っている人  | 南米の国を2つ以上言える人            | 日本以外で流行っている歌、みんなが知っている歌を歌える人         | 最近のニュースで、日本以外のことで興味を持った人        |
| 名前  | 名前                       | 名前                                   | 名前                              |
| 何   | どこの国                     | 曲名                                   | どこの国の何                          |
| <u>北京以外</u> の中国の都市名を2つ以上言える人又は <u>ソウル以外</u> の韓国の都市を2つ以上言える人 | 外国に手紙を出したことがある人          | 日本語以外の言葉で、自己紹介ができる人                  | 国連 United nations の事務総長の名前が言える人 |
| 名前  | 名前                       | 名前                                   | 名前                              |
| どの都市名   | どこの国へ                    | どの言葉                                 | 韓国人の                            |

私のたいせつなもの・夢は( )です。その理由は・・・と答えられる人  
 これからの世界に必要なものは( )だ。その理由は・・・と答えられる人  
 一番大切なものはお金だと思う人。その理由を述べてもらう。

**21 世紀東アジア青少年大交流計画**  
(英文名: JENESYS Programme)  
**Japan - East Asia Network of Exchange for Students and Youths**

平成19年(2007年)1月15日フィリピンで開催された第2回東アジア首相会議において、大規模な青少年の交流を通じてアジアの強固な連帯にしっかりした土台を与えるとの観点から日本政府により実施された事業です。平成19年から5年間毎年6000人程度の青少年を日本に招き、相互の理解と友好関係の促進を目的とした交流プログラムです。

目的:

- (1) 地域共有の将来のビジョンを作り、アジアの強固な連帯の土台を作る。
- (2) 青少年の相互理解の促進を図り、アジアでの良好な関係を作る。

概要:

東アジア首相会議参加国(中国、韓国、ASEAN、インド、オーストラリア、ニュージーランド等)の高校生、大学生を中心とする青少年を今後5年間、毎年6000人程度日本に招聘。(短期滞在、中長期滞在)費用は、国の予算で支出予定。

中国訪日団第1陣(202名)5月30日~6月7日 **高校訪問日6月1日(金)午後**

日本滞在の内容は、都内視察(外務省訪問、東京タワー、浅草、江戸東京博物館、本所防災館、お台場等)地方視察(工場、福祉施設見学、ごみ処理施設見学、高校訪問、ホームステイなど)等です。その中の

**<訪問校>**

**都立成瀬、都立神代、都立杉並総合、都立工業、都立富士、都立国分寺、都立淵江、文京女子学院大付属、お茶の水女子大付属(以上9校)**

プログラムは各校ごとに異なりますが、5・6時限の授業の参加など(英語の授業参加、実技系の授業参加などや放課後は、部活動参加、伝統芸能の披露、武道の披露、生徒同士の交流、ポップカルチャー紹介などがありました。

訪問人数は、生徒20名程度、引率の教師等3名程度、生徒の男女比は概ね4:6、通訳2名くらい、生徒は英語で一生懸命会話していました。

**中国訪日団第4陣(200名分) 9月17日~9月25日 高校訪問日 9月19日(水)午後**

**都立総合工科、都立杉並総合、都立多摩工業、都立田無工業、都立瑞穂農芸、明治学院東村山、品川エトワール女子、トキワ松学園、筑波大学附属**

今回は、財団法人日本国際協力センター（JICE）の実施事業に協力する形で行いました。以下、都立成瀬高等学校の交流の報告です。

平成19年度

21世紀東アジア青少年大交流計画(日中21世紀交流事業)  
中国高校生訪日団第1陣 ~ 中国高校生との交流会 ~  
都立成瀬高校 佐藤 公作

本校では、6月1日（金）午後、財団法人日本国際協力センター（JICE）からの紹介により、中国高校生20名（男女各10名）及び引率の先生3名を受け入れ、交流しました。

当日は、樺祭体育部門のため、交流プログラムは以下の4つを計画しました。

|                   |            |
|-------------------|------------|
| 体育祭見学と参加(綱引き)     | 校舎案内       |
| 部活動交流（茶道・吹奏楽・ダンス） | 生徒会執行部との懇談 |

前日雨のため、体育部門の予定が遅れ、部活動交流は残念ながら茶道体験だけとなってしまいました。綱引きでは、本校側が2戦2敗でした。体育祭中ではありましたが、担当生徒が校舎を案内しました。体育祭が大幅に遅れ、時間が十分取れない中、視聴覚教室で行った懇談会は、高校生活や恋愛などについて、話し合い、相互に理解を深めることができました。懇談会の最後には、双方から挨拶があり、中国高校生一人一人に、思いを込めたお土産を渡しました。

別れは名残惜しく、再会を期待しつつ、思い出の集合写真をパチリ。有意義な交流となりました。



懇親会での集合写真です。

交流会のスナップ写真

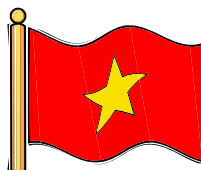


体育祭で、綱引きをしました。結果は中国側 2 戦 2 勝



再会を願って、サヨウナラ！

東京都国際教育研究協議会主催 2007年 ベトナムスタディツアー報告



| 日    | 曜日 | 時間    | 日程   |
|------|----|-------|--|
| 8/25 | 土  | 16:25 | 羽田 18:55(関西発) 21:50(ハノイ着)(JL755) ATS ホテル                                 |
| 8/26 | 日  | 7:30  | 世界遺産のハロン湾視察 4時間のクルージング 日本の援助による橋を望む水上生活 鍾乳洞 奇岩など視察 夜小樋山 VJCC 所長との交流会     |
| 8/27 | 月  | 8:30  | JICA 事務所打合せ 中川所長による JICA 事業の説明と質疑  |
|      |    | 9:30  | 青年海外協力隊員(鐘ヶ江ゆき 日本語教師1名)活動現場の貿易大学視察、日本語科を持つ附属高校視察 高校生との交流                 |
|      |    | 午後    | ハノイ市内視察 文廟(孔子をまつるために建立された廟。1076年には、境内にベトナム最初の大学が開設。)市内湖などバスで遊覧 市街散策      |
|      |    | 16:30 | VJCC 日越人材協力センター(ハノイ)訪問・視察 小樋山所長による説明と質疑、学生の学習風景視察 夜 VJCC 専門家、青年協力隊員との交流会 |
| 8/28 | 火  | 7:00  | ハノイ発 ホアビン省 バイク通勤の渋滞 石炭選別場視察  |
|      |    | 9:30  | ホアビン着<br>青年海外協力隊員(柴田直樹 野菜隊員1名)活動現場視察                                     |
|      |    | 12:00 | 昼食(専門家2名・協力隊3名 JICA インターン大学生1名)  |
|      |    | 13:30 | ホアビン省保健医療サービス強化プロジェクト 視察   |
|      |    | 15:00 | ホアビン省発 ハノイ   |
|      |    | 17:30 | ハノイ着   |
|      |    | 18:30 | 夕食(JICA ベトナム事務所所長 中川寛章 次長竹内智子 鈴木和信さんとの会食)                                |
|      |    | 23:10 | ハノイ発 機内泊   |
| 8/29 | 水  |       | 関西空港 羽田空港 帰国   |

## 東京都国際教育研究協議会 ベトナムスタディツアー

全国国際教育研究協議会顧問、元都立農産高校校長  
団長 矢田部正照

今回、「ベトナム国」研修ツアーを計画した全国国際教育研究協議会（含東京都）は、1970年に現「JICA」の前身である外務省管轄の「海外移住事業団」の支援によって、中南米等への日本人移住者を派遣する青少年の育成に向け、農業関係高校を中心に、高等学校の教育研究団体として設置されたものである。当時、移住は、国家的事業でもあった関係で、設立早々に、文部省（当時）が認定する研究団体の指定を受け、以後、今日まで続く教育研究団体の一つとして活動している。それ故、本会が主催する英語弁論大会や留学生の日本語弁論大会において、「外務大臣賞」や「文部大臣奨励賞」の申請が可能となっている。



設立当初は、当会の生みの親でもある「海外移住事業団」が、会の一層の充実発展を図る目的で、全国大会の開催や指導者の中年米への研修についても多大な財政負担をしてきた。こうした支援があって、今日では農業高校はもとより普通、工業、商業等々全国高等学校の2500校、(約50%)が加盟するまでに発展してきた。当会が、組織の充実とともに、学習指導要領にも示されている国際理解教育の発展に大きく貢献できたのも、生み親でも

ある「JICA」の40年にわたる支援の賜物でもある。

一方、活動内容については、設立後40年、社会の変革と共に移住の啓蒙から、海外理解教育へ更に、名称を変えて国際理解教育となり、今日は国際貢献。開発教育へと静から動へと研究内容も変わりつつ、常に国際理解教育推進の先達となって指導的役割を果たしてきた。

しかし、当会の生みの親であり支援母体であった「移住事業団」も「国際協力事業団」さらに「国際協力機構」へと統合され、組織がますます肥大化されるなかで、当



会の存在も躊躇される時代となってきている。

従って、「JICA」による当会設立から今日までの支援とその継続、さらに、当会の国際理解教育の推進についての関り等を、より明確にしておくことも今後の課題であると思われる。

こうした時代的背景はあるが、「JICA」関係職員との永年のお付き合いもあって、当会が主催する海外研修では、青年海外協力隊員の活躍現場や開発途上国への「ODA」支援による事業等の見聞について常に便宜を図っていただき、毎回、内容の充実した研修旅行となっている。特に、現地では、JICA職員の懇切丁寧な応接もあって、帰国後の研修報告等は、教育現場でも補助教材として効果的に利用されていると聞き及ぶ。

今回のベトナム国ハノイのツアーもJICAの「ベトナム国。ハノイ支所」や「ベトナム日本人材協力センター」の各所長はじめ職員の方々の多大なご配慮もあり、僅4日間の滞在であったが、大変中身の濃いツアーができた。

この旅で注視されたのは、「ベトナム日本人材協力センター」が設置されていることである。過去に旅した国々では、こうした名称のセンターは見聞することがなかった。全く目新しいもので、今後の一層の充実を切望



して止まない。このことは、本年度、当会の全国大会が出雲で開催された折、パネラーとして出席された〔国際協力銀行〕の方に、「ウズベキスタン」へ生徒を引率された先生からの質問で、「ODAで供与された大型機械が手付かずのまま放置されていた」と指摘され今後の対応策について質された一件があった。彼は、「現地人を日本国内で技術養成をして母国へ戻している」と説明をされたが、このことは目新しいことでもなく、供与された機会の類や、プラント等についても同様で、20年、30年前から指摘されていることである。それ故、途上国への支援は、効率的な活用の上からも、事前の人材養成が大切であり「日本人材協力センター」が益々重視されてくるものと思われるからである。先日キルギスか

らの帰国者の話にも日本人材協力センターが3～4年前に設置されたと話された。これからは、物の供与と並行して途上国における「日本人材協力センター」の一層の充実が期待されるものとベトナムの旅から実感した。

以下は、各団員による、ベトナムの町並み、青年協力隊員の活動、専門家の活動、ODAに関すること、ハノイ周辺の視察、日本人材協力センターの職務内容、ベトナムの食材等についての報告である。(特に順序はない) (文責 矢田部)

## ベトナムの人々の心をつかんだ協力活動

### 地道な途上国支援が日本への尊敬と信頼をひろげる

新宿山吹高校 地学教諭 斉藤宏

授業をしていても、活力が感じられず、進路を聞いてもまだ決めていない、ましてや将来なになりたいたいなんて質問にはまったく答えも帰ってこない。最近日本の若者はどうなってしまったんだと嘆くばかりではと、新鮮な反応を期待して熱い授業をしようにも生徒たちとのギャップがはかり知れないほど大きく埋めようがないジレンマが続いていたが、久しぶりにベトナムの若いエネルギーに圧倒されて元気がでた。

今回のベトナムスタディーツアーは東京都公認研究団体、都国際研の恒例のスタディツアーとして結団された、今までにマレーシア、ジョルダン、コスタリカと現地の JICA 国際協力の最前線を訪ね、開発途上国の今を知り、その姿を授業を通じて生徒にフィードバックするために続けてきた。旅費は当然自分持ちであるが、JICA への便宜供与を申請していくため、現地ではこちらの希望に基づきスケジュールを立て、JICA 職員の案内がつき、山奥の青年海外協力隊員の現場やプロジェクトを展開している専門家の現場や現地の事務所をくまなく視察することができる。通常の旅行で行ったのでは見ることができない場所を見て、現地の人々の声を聞くことができる価値のある研修旅行になる。研修テーマは「ベトナムの国際協力の現場から日本の高校生に何を伝えられるか」と設定した。

私達が研究している開発教育は一言でまとめると、公正と共生を基本理念とする地球社会の実現をめざし、人類共通な課題である地球規模の開発問題をめぐる諸問題を理解し、その解決に向けて参加する態度と能力を養うための教育学習活動である。

つまりこの教育が効果を生むのは開発途上国だけでなく一緒に考える先進国の生徒たちにも同じ効果が生まれ、その相互作用で地球規模の問題の解決が進んでいくと考えられるのである。いわゆる国際理解を一步進め相互理解の地球社会を目指す教育活動である。

しかし、この開発教育は生徒に新しい気づきを与えながら進むため途上国に対する実践的な知識、理解をもっていなくては自分自身の問題理解がままならず、一方的な知識注入に



なってしまうため、開発教育を実践する教師は現地を知り多様な文化を理解することが要求されるのである。

その意味もあり、今回のようなスタディツアーは素晴らしい研修の場になるのである。今回現地で確認したかったことの一つは日本の青年が途上国の現場でどのように考え働いているのか、またその活動は現地の人たちの役に立っているのか、それを知りたかった。

最初に尋ねた青年協力隊員の鐘ヶ江ゆきさんは2005年の11月から2007年の11月まで2年間ハノイ国家大学 外国語大学 東洋言語文化学部 日本語学科で日本語教師として働いていた。ここはベトナム日本語教育界のパイロット校的役割をになっており、附属の高校においても日本語教育が開始されている。ベトナムでは日本語教育に力を入れ始め2003年からは中学でもパイロット校中心に日本語教育が始まっている。

活動内容は同大学の学生280名に会話、作文、音声学の授業を週16時間担当、同僚の40歳代から20歳代のベトナム人教師へのサポート、歴代JOCV担当授業をベトナム人教師に移行するためのTT授業など盛りだくさんの授業を受け持っている。鐘ヶ江さんは日本では日本語学校で中国人、ロシア人、韓国人等に日本語を教えていた先生である。

私たちを颯爽とした青いアオザイで出迎えてくれ、まるで現地の方かと思うほどベトナムの社会になじんでいた。私たちへの説明もアナウンサーのようにはっきりと美しい日本語で、こんな日本語をベトナム人が覚えてくれるのはうれしい限りである。

学生との対等な関係を保ちながら使える日本語を教えたいという彼女も学生のレベル差への対応や文化の差による同僚教師との意識の違いに悩みながらも、必ずしもいまままで自分が教えてきた日本式がいいとは言い切れないという考えも芽生えてきているようだ。

日本で働いていた日本語学校では日本語だけでなく外国から来た人たちの生活を助けるという立場だったが、いざ自分が異文化の中に来てみると、自分は日本語を教えに来ているのだが、逆に生活面では助けられているということも感じてきた。この後自分は何をすべきか考えると、そのお返しに日本で外国の人たちを助けることが重要なのかと思いつけている。と、ここでの技術協力活動がベトナムに利益を与えただけでなく、彼女に対しては内面を大きく成長させる役割をしたようにみえた。



彼女の教え子がいる附属の高校で、高校生たちにインタビューした。物怖じせず自分から、茶の湯、サムライなど日本の歴史に興味があると英語でしっかり話してくれたあとに日本語で自分の名前を紹介した。実はベトナムの社会の教科書は始めに日本

の明治維新の歴史から始まっているくらい日本が優先されていることもあり、その影響もあると考えるが、日本語を教える協力は、限りなく日本の文化を知ってもらうことに結びつくのだと思い知った。しかし、一番感じたのは生徒たちのエネルギーそれは積極性と前向きな姿勢であった。前向きという言葉がベトナムにはぴったりだろう。

驚いたのはベトナムには1年に一度教師の日があるのだという、それはその日に、学生は教師に対してお礼をいう日だそうだ、決して形式的な記念日ではなくほんとにその日には、生徒が花を持って教師を訪ね、心からお礼を言うのだそうだ、その日には次から次に教え子が尋ねてくるということで彼女のところにも尋ねてこられたそうだ。まさに教師冥利に尽きるという記念日だ。文化の違いと言ってしまうとそれまでだが、儒教の教えがベースにあることが、家族や年上や教師を敬う慣習を守っているのだろうと思って、調べてみるとそれだけでなく、この教師の日、世界では結構あることがわかった。アジアでは韓国、中国、台湾、タイ、インド、ネパールそれ以外にもイラン、ロシア、エクアドル、ザンビアと探すといくらでもありそうで、こうしてみるとアジアで見ると日本にないのがむしろおかしいということがわかって逆にがっかりした。



いずれにしても、ベトナムの生徒は勉強熱心で素直で異文化に対する好奇心が旺盛で教師を尊敬し礼儀を重んじるということで、私もここで教師をしたくなってしまった。

JICAは専門家も展開している。ハノイからおよそ3時間、北部山間部を持つホアビン省において保健医療サービス強化プロジェクトを展開していた。日本では地方でもそれなりの施設がいきわたっているが途上国においては地方との貧困格差と医療サービス格差が大きな問題である。

ベトナム保健省は平均余命・乳幼児死亡率・医師充足率等が全国平均に比べて劣っている同国北部の医療サービス改善が急務であるとし、山間部地域で医療サービスが立ち後れている人口80万人のホアビン省を医療サービス改善のモデル地域に選定した。レベルの異なる医療施設間で患者を移送する体制、いわゆる「リファラルシステム」の構築強化の拠点ともなる技術協力を日本に要請し、事前評価の後に老朽化したホアビン総合病院を日本の無償資金協力9.67億円で改善することになり、本年4月にハイテクブロックと呼ばれる病

院の中心部分が完成して稼動していた。

ハイテクブロック以外の病棟などはベトナム側の自助努力で5年間にすべての建物を建て替えるため今も入り口を入るとぬかるみで他の棟の建設が進んでいた。

病院などの援助においてはいつも問題になるのが、援助された機材の管理である。機材の管理は人の手によるものであり、物と人の教育は常に欠かせない。そこでJICAは5人の専門家を送りメンテや患者リファラルシステムなどの技術移転等を行い自力で運用できる能力を身につけさせると同時に院長などを日本の農村医療の先駆である長野の佐久病院で研修を受けさせた。

院長に、佐久病院とベトナムの病院の違いはどう思うかと聞いたところ、「いちばん違うのは医師が患者の身になって治療していることだ、また病院が地域の健康を守る活動をしている、これは農村をもつこの地域にとってまさにこれからこうしなくてはいけないというモデルになると思った。」と答えてくれた。

結局機材を生かすも殺すも人材である、良いリーダーを育てていけば良い人材が育つはずだ。その意味から日本での研修も実践的な場所の選定がよかったのだろう。

病院の中で働いている人は医師 76 名



看護師 200 名その他 100 名でともかく若い人たちの割合がおおかった。この若い人たちがここで最新の技術を修得して育っていくのはベトナムの将来のために良い影響を及ぼすことだろう。

病院の職員会議で、ハイテクブロックという建物の名前を日本とベトナムの協力の建物というように日本の名前を入れよう

と決めてくれたそうである。日本人の美意識として、援助しても自分がやったとなかなか主張しないところがあり他の国でもせつかくの日本の協力のはっきりしないことが多く残念だが、ここではベトナムの人たちの恩義を重んじる風習により良い方向に動いてよかった。

9.11 以降世界的な、テロに対する戦いにかかわる武力優先の国際貢献議論が主流になり、なぜか多く語られなくなった日本の技術援助と円借款は世界の途上国においてベトナムで

の貢献のように、青年海外協力隊や専門家などの人を中心に脈々と信頼を積み重ねている。考えてみれば一般会計は約83兆円だが特別会計を含めると387兆円もある日本の国家予算のなかで、2005年の日本のODA全体予算が7862億円その中でJICAが受け持つのは1601億円さらにその中でベトナム事業予算が約57億円である。ODA全体予算の7862億円は日本の人口で割れば一人あたり7千円前後である。開発援助を行っている国の中ではなんと22カ国中17位（2004年実績）でこれだけの経済活動を行っていながら恥ずかしい限りである。

日本は戦後復興においても世界の戦勝国から援助を受け今の経済の基礎を築いたことも忘れてはならないが、さらに忘れてはならないのは日本のさまざまな物質の自給率である。食料は40%、エネルギーは20%、鉱物資源もほとんど輸入に頼っている。

にもかかわらず日本が輸出で経済を潤わせている元は、世界のさまざまな国が日本に原料を売ってくれるからに他ならない。

日本にとって将来にわたり安定して資源を供給してくれる国と国の信頼関係はまさに今のODAが作り上げていくのである。豊かな国日本で精一杯自由を謳歌している若者に、その洋服も食べ物もハイテク機器の原料も何からなにまで身の回りの豊かな生活が主に途上国の資源により成り立っている現実を少しでもわかってもらえるように、今回の研修で見た事実を熱く伝え開発教育を進めていきたいと思うのである。

## 農業技術普及センター見学

### 現地人になりきっていた野菜隊員

都立戸山高校他 地学講師 栗原裕美

今回の研修旅行はベトナムでの実動は3日間の研修旅行でしたが、非常に密度の濃い内容で感激の連続でした。それぞれの場所で強く印象に残っていますが、私は最後の日に訪問したホアビン省の報告をしたいと思います。

ホアビン省はハノイから南西に位置し、車で2時間半かかりました。だいぶ山奥に入った様子で、途中で石灰や石炭の露天掘りの場所がありました。1日目に行ったハロン湾も石灰岩の島や鍾乳洞があり、またこの山奥にも採掘場があり、地下資源が豊富だという印象を受けました。前日のJICAでの説明では、ベトナムはとても良質の石炭が採れるとのこと。途中石炭の山があったので車を止めてもらい、少し分けてもらいました。学校の標本では見たことも無いくらい、ピカピカ光る石炭で、この沢山のサンプルは9月の授業の中で大活躍でした。午前中に訪問したのは、青年海外協力隊員で野菜隊員の活動現場でした。日本の農村を思わせる一面の田んぼが広がっていて、家は湿度が高いせいか高床式



でした。野菜隊員の柴田さんの話によると、この地域は米、サトウキビ、竹を栽培しているそうで、柴田さんはそのほかの野菜を有機農法で試しているとのことでした。循環型農法を色々考えているようで、実験農場に連れて行っていただきましたが、オクラやツルムラサキ、ナスなどが元気に育っていました。この畑で出会った農家の女の人や子供達とび

きりの笑顔だったことを思うと、協力隊員がいかにこの村に溶け込んでいるかがわかります。

昼食はこの地方の民族の家を移築したという場所で、農業普及センターの方々と交歓会をしながら楽しく頂きました。地元の鳥や豚の肉が素晴らしい味で、やはり元気に走り回っている動物は違うということが判りました。そして発酵したお米にお湯を注いだ不思議なお酒がとても美味しく、沢山吞んでしまいました。隊員の柴田さんは、地元の農家にホー

ムステイをしながら生活をしているとのこと、おばあちゃんの手作りの料理を毎日頂いているようです。農業普及技術センターの責任者の方に通訳をしながら説明して下さった時のなめらかなベトナム語は本当に現地の人になりきっているようで、とても頼もしく感じられました。今回の研修旅行でV J C C (ベトナム日本人材協力センター) 所長の小樋山さんがおっしゃっていた「人材協力」「人材育成」、大事なのは「人」だということがしみじみ感じられた訪問でした。

この研修では、普通、経験できない場所に行き、見学できたことは、自分にとって貴重なできごとで、これからの活動に活かしていきたいと思います。最後になりましたが、この研修について全般にわたり、手配して下さったJICAの皆様有難うございました。特にV J C Cの小樋山さんは日本での事前研修、現地での案内など、何から何までお世話になり、感謝しています。お世話になりました。

## 2度目のヴェトナム

杉野学園総務部参与 豊田岩男 (前全国国際研会長)

私がヴェトナムを訪れるのは2回目であり、2度外国を訪れることになった初めての国がヴェトナムです。今回は、2003年8月12日から8月18日までの6泊7日の日程で、ホーチミンからハノイまで南から北へ北上する行程のヴェトナム旅行でした。全国歴史教育研究協議会の主催で行われたためヴェトナムの古代史から現代史の史跡を巡るものでした。その時に購入したキーホルダーのメダルに「1010・2010」という刻印があり、私も世界史の教員であったので、1010と言う数字が何を意味するか予想はできませんでした。確認の意味で、年表を見てみると、以下のようなことがわかりました。

中国によるヴェトナム支配は、始皇帝の秦時代から始まり、前漢の武帝時代には南越に九群をおいて直接統治を行いました。中国統治の南限は、北緯17°付近のユエカホイアンの辺りまでで、それより南はインド文化圏でした。10世紀になると中国による周辺諸民族にたいする武力的圧力が弱まり、1009年には交趾(現在のハノイ)に都を置き



李朝によるヴェトナム人の大越国が成立しました（この国が中国により承認されたのは1010年）。大越国は19世紀末にフランスにより植民地化されるまで、王朝の変遷はありましたが、ほぼ独立を保ちました。第2次世界大戦中に日本軍がヴェトナムに進駐しましたが、日本の敗戦後ホーチミンによるヴェトナム民主共和国（北ヴェトナム）がハノイを中心に成立し、フランスの支援したヴェトナム国と戦争になりました。フランスが撤退した後アメリカ合衆国が支援するサイゴンを中心とするヴェトナム共和国（南ヴェトナム）とヴェトナム戦争が続き、1975年にサイゴンが陥落して北ヴェトナムを主体とするヴェトナム社会主義共和国が成立し、現在に至っています。

上記のメダルには1010の後に2010とありますから、建国1000年の記念行事を予定しているのだろうと想像しました。そして、その2010年頃には、最初の旅行で印象の良かったヴェトナムを是非とも再訪しようと思っていました。しかし、この旅が意外にも2007年の夏にいち早く実現できたことは本当に嬉しいことでした

前回には行けなかったハロン湾のクルーズは、天候にも恵まれ、素晴らしいものでした。この風光明媚な多島湾が、13世紀にはモンゴル軍の侵入を阻止しました。

前回は史跡を巡る観光旅行で、ヴェトナムの表面を外から眺めて通り過ぎた旅でありましたが、しかし、今回はヴェトナムの社会に一步踏み込んで諸相を見ることができ、ヴェトナム理解がより深まったと思います。鐘ヶ江ゆき、柴田直樹ご両人の青年海外協力隊としての活躍ぶり、それにともないハノイ国家大学外国語大学の付属学校の生徒たちやホアビン省の山深い農村の子供たちに会うことができたことは、強く印象に残っています。特に、ヴェトナムの子供たちの目の輝きは、今の日本の子供たちには見られなくなってしまうように感じられました。

また、今回は小樋山さんを初めとしてジャイカの皆さんのご協力により、ODAなど政府の活動の一端を知ることができたことは、私にとって本当に勉強になりました。

最後に、今回の旅を楽しくも有意義にいただいたジャイカの皆さんと同行の国際研の皆さんに深く感謝します。有り難うございました。

## ヴェトナムの衣食住

豊田 純子

海外旅行経験の少ない私にとって、アジアの国への旅はヴェトナムが初めてでした。背丈は日本人より低めのスマートな体型でしたが、顔つきには全く違和感がなく、日本と変わらない空気を感じました。ただ、生きるエネルギー、人なつっこさ、純朴さに私たちが忘れてしまった一昔前の日本を思い出し、羨ましくもありました。私は、日頃から衣食住に興味や関心を持っています。ヴェトナムでもそんな観点で町や村や人々を見てきました。



衣については、色あざやかでデザイン性の高いアオザイ、円錐形のわら帽子、バイクに乗るときに着ける色や柄の豊富なあの大きなマスクが印象的でした。ただ、アオザイは機能的ではないため、日常着からは遠い存在のようです。日本の和服のような扱いなのもかもしれません。それより注目したことは、全国民が乗っているのではないかと思えるような驚異的なバイクの普及のためか、女性もパンツ姿の人がほとんどで、スカート姿を目にする機会があまり無かったということです。また、バスの車窓から見ていて、ウエディングドレスをディスプレイした店が非常に多いのに驚きました。独特な仕上げの花束を売る花屋が多いのにもびっくりしました。理由ははっきりとは分かりませんが、慶弔の儀式を大切にする国民性かもしれません。

食については、「フォー」の味と食感が忘れられません。ヴェトナムでは全般的に食材が豊富で、特に野菜やフルーツは珍しいものが多く、美味しいものばかりでした。調味も日本人の味覚に近いと思いました。ヴェトナムのほんの一部しか見ていませんが、広く豊かな農村風景と温暖な気候から生まれる豊富な食材は、ヴェトナムのなによりの宝物のように思われました。あぜ道でのんびりと草を食む牛や水田に放たれているアヒルなどの光景は、ゆったりとした、しかし機能的な農村風景でした。



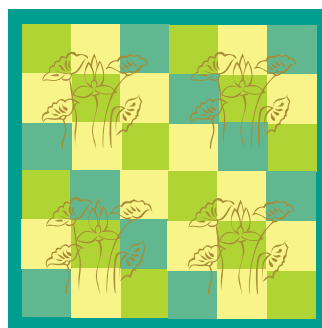
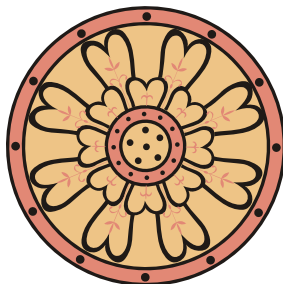
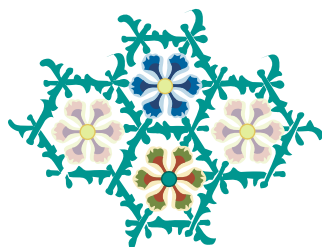
住については、街中に見られる洋風な要素を取り入れた3階建ての建物が、ヴェトナム独特で、興味深かったです。窓には必ずバルコニーががついていてコンクリートあるいはモルタル仕上げの独特な家屋でした。外観の仕上げはカラフルで、黄色を縁起の良い色として好むのだそうです。植民地時代に定着した建築様式のようなのです。ホアビン省に行った時に見られた、かやぶきで竹をふんだんに使った高床式農家も印象深いものでした。住居

に入ってみることができなかったことは残念でした。また、畑や水田の中にあるレンガ造りの小さな家は、これがお墓だと聞いて驚きました。日々、子孫が生活し作業している中であって、ずっと大切にされていることが感じられ、いいことだなーと思いました。

最近、テレビでベトナムの食について報道をしていました。水田で農作業をしている男性が「米は人間の血だ。大切なものと親から教えられている。」と言っていました。そして、収穫の後には、一束の稲が墓前に供えられるのだそうです。

J A I C Aの方々、同行の先生方のご好意で、素晴らしいベトナム旅行ができましたことを感謝致します。

私の心に今なお強く印象に残っていることは、ベトナムの子供たちのキラキラと輝く瞳です。



平成19年度 関東甲信越静地区高等学校国際教育研究協議会  
事務局長会議・研究協議会

報告：都立日野高校 高島 みゆき

日時：平成20年2月1日(金) 11:00~16:00

場所：JICA 筑波国際センター

講演：「学校における国際協力への取り組み(身近な教材を共有して)」

開発教育協会 理事 木下 理仁

1. 「ちがいのちがい」・・・カードやビデオを見る。話し合い、解決策を考える。

「Aは だが、Bは だ。」この違いは、あってもよいか？なくすべき違いか？  
これをまず、自分自身で考えてから、グループで話しあう。そして発表する。

日本の5歳児の平均体重は13kgだが、シオラレオネの平均体重は5.7kgである。

アフリカの年間穀物消費量は219kgだが、アメリカは707kgである。

牛肉の消費量は1600年は1.1kgだが、2000年は7.6kgである。

日本のカレーは、固形のカレーを使うが、スリランカ・インドは、香辛料を使う。

南米のペルーやエクアドルでは、ハムスターを食用に食べる。

ガーナは、チョコレートの原料のカカオを生産するが、チョコレートはほとんど食べていない。

アフリカでは、食糧難で飢餓に陥る国もあるが、アメリカなどの先進国では、バイオ燃料として、サトウキビやトウモロコシを生産してエネルギーにしている。

・・・他、曖昧な質問を作り、調べ学習させてもよい。

## 2. 教材紹介

<映像教材>

「えいごでしゃべらないとJr」

「NHK 地球データマップ」NHK教育 木曜日夜11時

・・・事実・データに基づく解説があり、使いやすい。

<書面教材>

「ケータイの一生」(開発教育協会)・・・コミュニケーションと携帯、携帯の大量生産・大量廃棄、コンゴ民主共和国、携帯の原料争奪戦(希少金属獲得による紛争)等扱う。

「地球データマップ第8回 平和への地図」07年8月「南で起きる戦争」

NHKスペシャル「戦場のITビジネス~狙われる希少金属タンタル~」01年9月

「援助する前に考えよう」(開発教育協会)・・・国際の初歩向き  
 「参加型学習で世界を感じる」(開発教育協会)・・・手法の紹介  
 「家庭科写真資料集」(教育図書)・・・家庭科教材であるが、国際問題や世界を考える資料が多くある。

他、新聞の切り抜きを利用した教材などもか紹介していただいた。個人ではなかなか教材を集める時間もないので、教材の共有化をはかる研究会を実施していきたいと思った。

### 2006(平成18)年度 事業報告

| 実施月日          | 内 容   |
|---------------|---|
| 5月25日         | 東京都理事会及び全国総会 JICA 地球広場  |
| 9月11日         | 国際協力機構 地球ひろばとの定期協議会   |
| 8月24日～<br>25日 | 第43回 全国高等学校国際教育研究大会・長野大会<br>六本木高校 竹山が、分科会1「文化祭、ボランティア活動等を活用しての国際交流」を発表  |
| 11月23日        | 生徒研修会 (拓殖大学留学生との交流会を兼ねる)<br>拓殖大学文京キャンパスにて<br>参加生徒・留学生44名、引率教員24名        |
| 12月15日        | 第1回研究協議会 『グルジアの食文化と調理実習』<br>グルジア語とグルジア食文化の講演、グルジア調理実習<br>都立六本木高校 参加者21名 |
| 3月            | 研究協議会   |

### 2007(平成19)年度 事業報告

| 実施月日     | 内 容   |
|----------|---|
| 5月24日(木) | 東京都理事会及び全国総会 JICA 地球広場  |
| 6月～      | 21世紀東アジア青少年大交流計画<br>JICE と連携し、高校生の学校受け入れ(半日訪問)                    |
| 6月22日(金) | 第27回高校生英語弁論大会および第7回留学生日本語弁論大会<br>東京都予選 都立九段高等学校                   |
| 7月24日(火) | 第1回研究協議会<br>「国際教育へのIT活用のヒントと実践」<br>講師： 斉藤 宏(都立新宿山吹高校 教諭) 都立新宿山吹高校 |

|                     |   |
|---------------------|---|
| 8月23日(木)<br>~24日(金) | <b>第44回 全国高等学校国際教育研究大会・島根大会</b><br>大会テーマ「日本人の心のみえる交際交流のありかた」<br>日本語弁論：都立六本木高校2年 角田澄蔓さんが参加。<br>「文部科学大臣奨励賞」を授賞。 |
| 8月25日(土)<br>~29日(水) | <b>ベトナムスタディツアー 東京都国際研主催</b><br>ハノイ、VJCC日越人材協力センター、ホアビン、ハロン湾他  |
| 11月11日(日)           | <b>生徒研修会</b><br>拓殖大学 文京キャンパス(東京都国際研と拓殖大学の共催)<br>高校生34名、拓殖大学留学生15名、教員(高校側)15名、<br>教員(拓大側)4名生総計約69名             |
| 12月11日(日)           | <b>世界の教員との懇談会(国際交流基金主催)</b><br>国際交流基金(赤坂アーク森ビル)<br>交流基金が招聘した世界各国からの教員(90名)と懇談。                                |
| 3月4日                | 第2回研究協議会 新宿山吹高校   |
| 3月31日               | 機関誌「国際教育37号」編集・発行   |

### 2008(平成20)年度 事業計画

| 実施月日     | 内 容  |
|----------|--|
| 5月24日(木) | <b>東京都理事会及び全国総会</b> JICA 地球広場  |
| 6月22日(金) | <b>第28回高校生英語弁論大会および第8回留学生日本語弁論大会</b><br>東京都予選<br>都立九段高等学校  |
| 7月25日(金) | <b>第1回研究協議会、生徒研修会 JICA 海外移住資料館(横浜)</b><br><b>「ブラジル移住100周年記念企画」</b><br>日本ブラジル交流年をして各種企画を実施。海外移住資料館の見学。<br>中南米の日系社会でボランティア活動をされている方の話やワーク<br>ショップ、日系ブラジル人などの課題などについて<br>教員研修会と生徒研修会を兼ねて行う。 |

|                     |   |
|---------------------|---|
| 8月21日(木)<br>～22日(金) | <b>第45回 全国高等学校国際教育研究大会・埼玉大会</b><br>大会テーマ「Education for Sustainable Development<br>持続可能な発展のための教育活動」<br>浦和コミュニティーセンター |
| 10月～11月             | <b>生徒研修会</b><br>拓殖大学 文京キャンパス(東京都国際研と拓殖大学の共催)  |
| 12月                 | <b>第2回研究協議会</b> <b>文化理解と料理実習を予定</b>   |
| 3月                  | <b>第3回研究協議会</b> 新宿山吹高校  |

## 編集後記

本研究会の活動報告及び研究機関誌「国際教育37号」発行にあたり、今まで研究会にご尽力されてきた方々、寄稿していただいた方々に心よりお礼申し上げます。

本号37号は、「平成18年度・19年度の2年間分の事業報告」を掲載しています。数年前より都教委の方針変更に伴い、公的な会費がなくなり、個人会費に大きく依存する状況で、経費の面で大きく削減をしなければいけなくなりました。また、学校での仕事量の増加等により、なかなか研究会に参加し活動を活性化することが難しい状況になっていることもあります。

しかし、グローバルな世界での「国際教育」の重要性を再確認し、地道な活動、生徒に還元できる活動をめざして、日々努力していきたいと考えています。

忌憚のないご意見・ご感想をいただき、さらに本研究会を充実したものにしたいと考えています。今後もよろしくお願いたします。

東京都立六本木高等学校 竹山 哲司  
東京都立日野高等学校 高島みゆき

## 国際教育 第37号

発行日 2008年(平成20)年5月  
発行者 東京都国際教育研究協議会  
会長 高田 幸一  
(東京都立雪谷高等学校)  
事務局 東京都立忠生高等学校  
事務局長 増田 雅子  
  
印刷所 社会福祉法人 東京コ口二一  
〒165-0023  
東京都中野区江原町2丁目6番7号  
TEL 03-3953-3536 FAX 03-3951-9163

# 東京都国際教育研究協議会 会則

昭和 45 年 4 月 1 日施行

## 第 1 章 名称及び所在地

**第 1 条** この会は東京都国際教育研究協議会と称し、事務局を原則として会長校におく。

## 第 2 章 目的および事業

**第 2 条** 本会は学校において、国際理解と国際協調の精神を涵養し、国際社会の中で積極的に行動できる有為な人材の育成をめざす国際教育と実践の推進を図ることを目的とする。

**第 3 条** 本会はその目的達成のため次の事業を行う。

- 1 各教科科目および特別活動全ての教育活動の中での指導と実践。
- 2 国際教育に関する教師の実践教育と研修。
- 3 国際教育に関する諸行事。
- 4 海外事情の調査研究および資料の収集。
- 5 調査研究報告等の印刷物発行。
- 6 関係官庁および諸団体との提携
- 7 その他目的達成についての必要な事項。

## 第 3 章 会員および役員

**第 4 条** この会の会員は、次の通りとする。

- 1 学校会員 東京都内の小学校、中学校、高等学校。
- 2 個人会員 東京都内の小学校、中学校、高等学校教員、またはこれに準じるもの。
- 3 賛助会員その他この会の趣旨に賛同するもの。

**第 5 条** この会に次の役員を置く。

- 1 会 長 1 名  
会長は、理事会において互選する。ただし総会において承認を求めるものとする。
- 2 副会長 3 名  
副会長は、理事会において互選する。副会長は、会長を補佐し、会長事故あるときは、これを代行する。
- 3 理 事 若干名  
理事は、総会において選出する。理事は、会務を掌理する。
- 4 監 事 2 名  
監事は、総会において選出する。監事は会務

を監査する。

**第 6 条** 役員任期は 1 年とし再任を妨げない。補充された役員任期は、前任者の残任期間とする。

**第 7 条** この会に、顧問および参与を置くことができる。顧問および参与は、理事会の推薦によるものとする。

**第 8 条** この会に、事務局長および書記を置くことができる。事務局長および書記は会長が委嘱する。

## 第 4 章 総会および理事会

**第 9 条** この会の会議は次のとおりとする。

- 1 総 会  
総会は、年 1 回以上開催する。総会は、理事会において、必要と認めるとき開催する。
- 2 理事会  
理事会は、会長が必要と認めるとき開催することができる。

**第 10 条** 総会においては、次の事項を協議する。

- 1 予算、決算の報告
- 2 この会の事業に関する重要事項。  
総会を開くことが困難な場合には、理事会をもって、これに代えることができる。

**第 11 条** 理事会においては、次の事項を審議する。

- 1 予算の決議
- 2 決算の承認
- 3 必要な会務

**第 12 条** 会議の議決は出席者の過半数によるものとする。

## 第 5 章 会 計

**第 13 条** この会の年会費は次のとおりとする。

- 1 学校会員 2,000 円  
(全日制、定時制それぞれ 1 校)
- 2 個人会員 1,000 円
- 3 賛助会員 10,000 円以上

**第 14 条** この会の会計年度は、4 月 1 日に始まり、翌年 3 月 31 日に終わるものとする。

## 第 6 章 付 則

**第15条** この会則は、総会の議決を経なければ改正  
することができない。

**第16条** 昭和61年5月27日一部改正  
昭和61年5月30日名称改正  
昭和63年5月29日一部改正  
平成5年5月27日一部改正  
平成15年6月1日一部改正

